



志々よのくま  
霜夜鐘十字辻筵

錦壽堂梓

五編上



武田交來錄  
大蕙芳年画



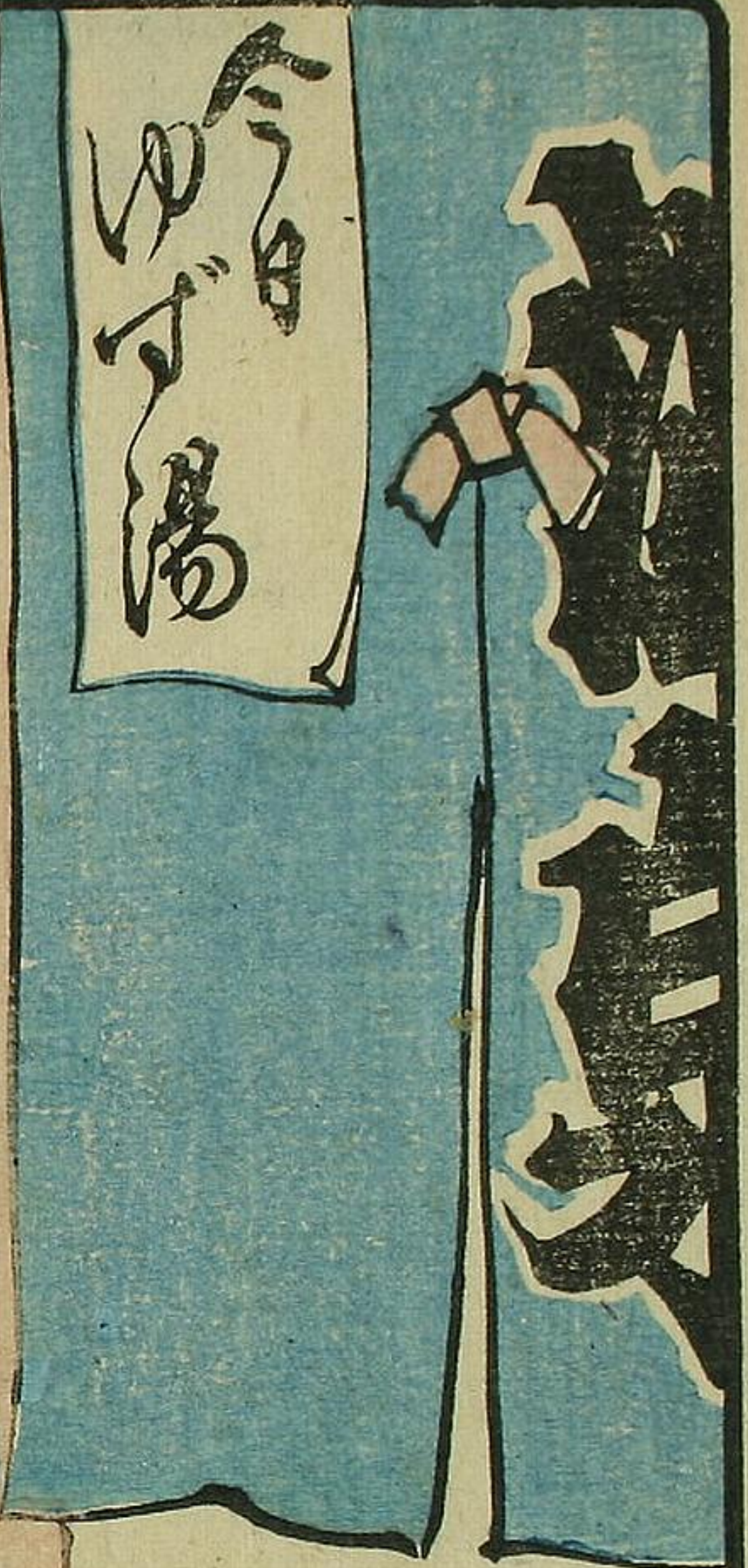
杉田薰寓

五編下



五編中

A507  
55



十字の

けつ

五編

下の

巻

より年

志

後素

持

248-82587

工、原稿の淺草公園地河竹脚色の新狂言その又作意の巧妙の  
合さういふと林と想像で價の小れは千金丹工、第一眞負を集へ  
演劇評判能くつゝつゝ幼童少女が口眞似をなさるが程小市中へ鳴り  
響きたる霜夜の鐘も撞木が生木の抽るを小生ビツクリニマツリ漸  
と爰は打たる五編の結局無頼の悪徒も善人の諭ふ依て罪を悔む  
仁義の道も明らかく治まる御代の形勢を借て綴る狂言綺語を我有  
顔小編輯の名も恥のしき業をうら此千金の價ある教を廣く傳え  
との本意なるを彼千金丹は元祖と本家の二派あると同様小見込

庚辰十一月

# 武田交來記



香月交童五上



劍道師範  
杉田郷左工門

杉田郷左工門  
父郷左  
切害な  
件六浦分譚  
七奉て口画小著良

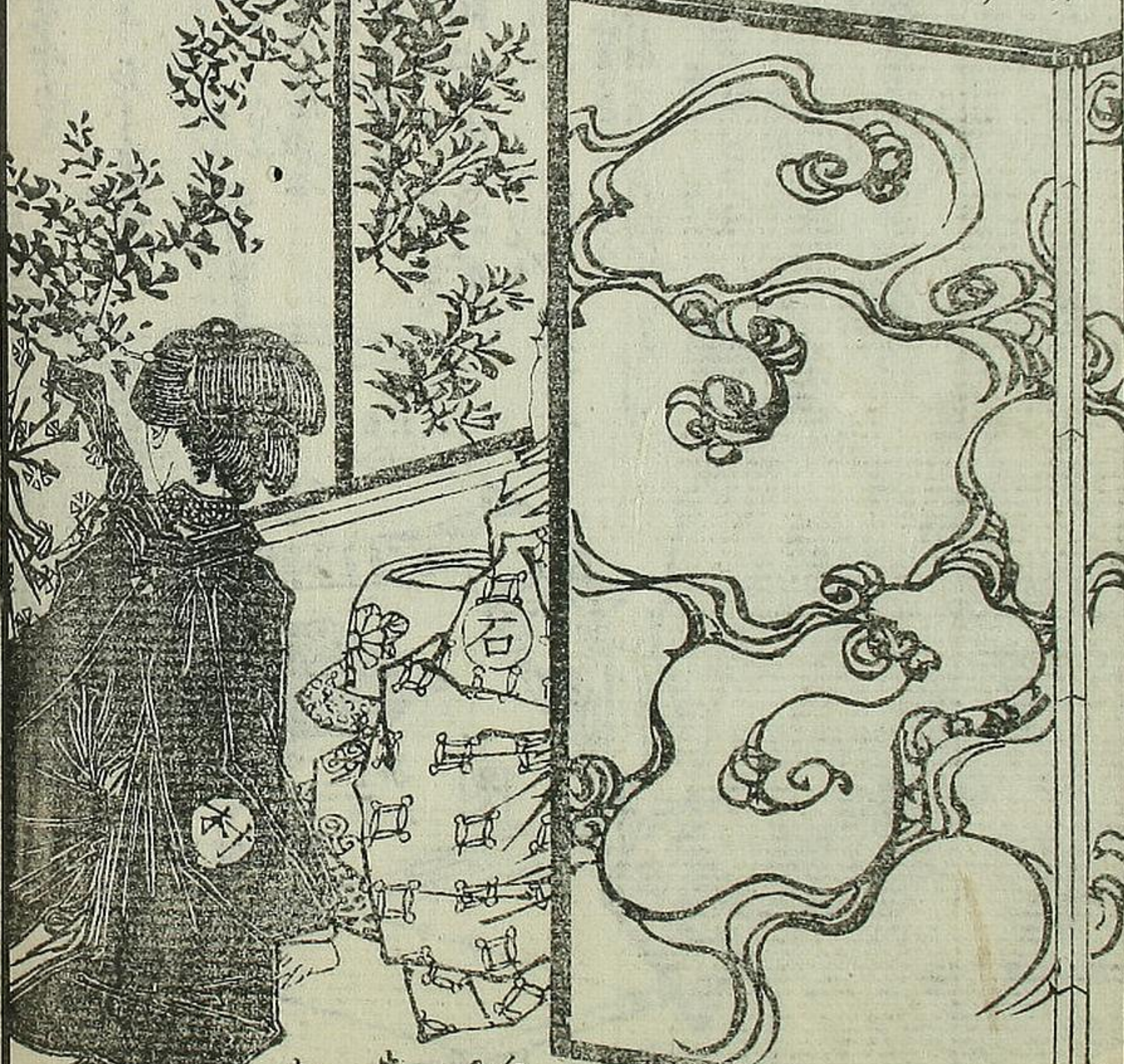


杉田郷左  
六浦正三郎



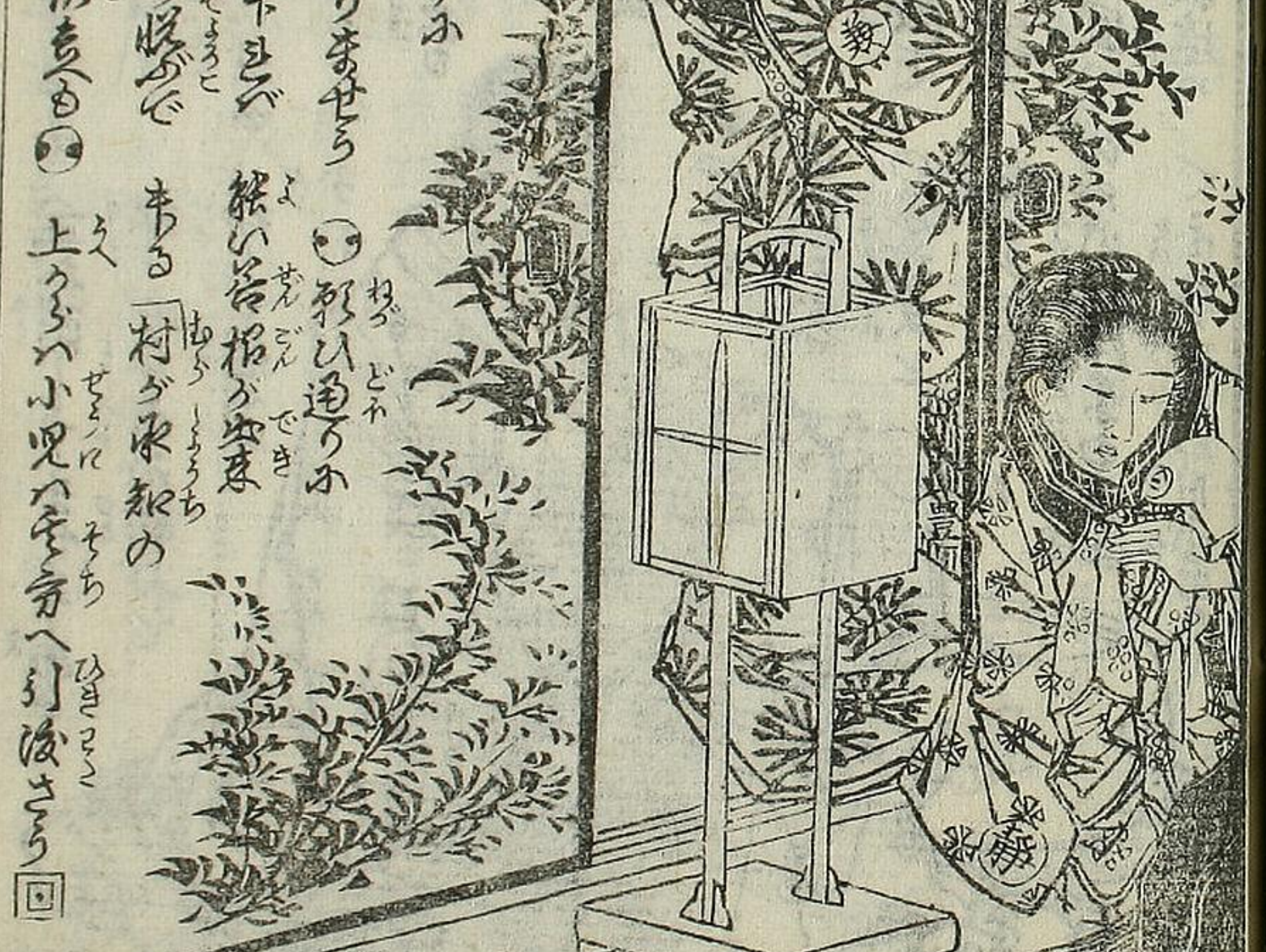


ついでに夏はひくぢぢり村が  
 懐妊被せと後とひ後  
 一申渡由みる十月と  
 侍て安々と出立る世  
 そのせうに 幸すあつた  
 生小児ハ教百風放ふ  
 ちるまぐ死去臣迷懐  
 あひるまゝに 僕か門  
 糸へ棄る世の  
 危ぞ天より  
 初うり一子  
 敵とあふ放  
 母ハ村の  
 乳もあれハ



お世  
 方へ  
 静か  
 ませ下  
 抱  
 報七

度へ取ッて  
 山子と  
 育て  
 僕  
 如何なる村 一工取ふ  
 金半と何の香がごのませら  
 た扱の手まてわりのキま  
 け子と棄る一祝達由は恨か  
 ぶりのませらう佐 まで傍まの

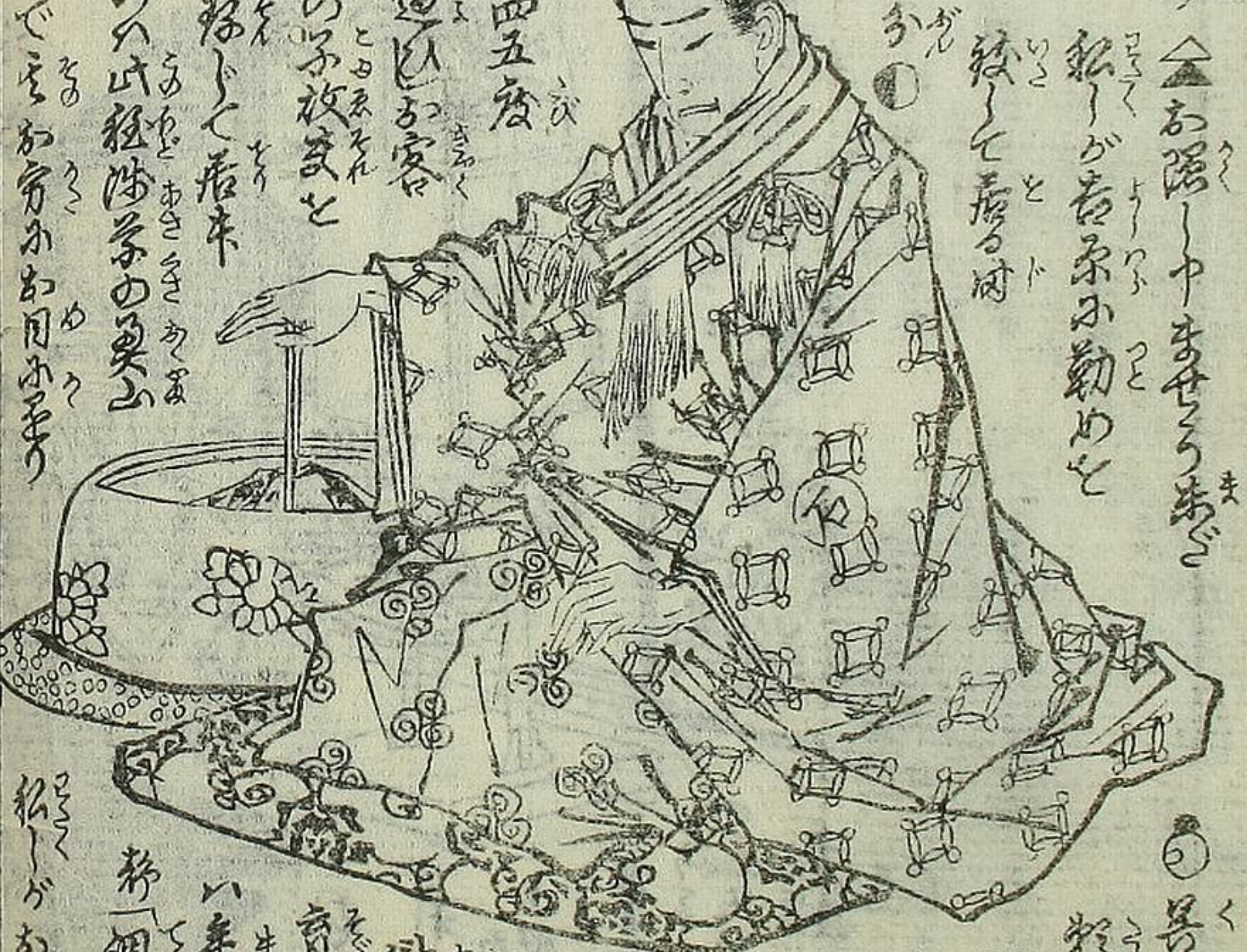


ハト胸り  
 静か  
 ませ下  
 抱  
 報七  
 二人の出まのり  
 静か  
 ませ下  
 抱  
 報七



「何れにおもひてござりますか  
 おんを被成て下さるは、  
 お二人さん此流るるの世の損  
 男の子でござりませぬ、  
 是の世の良面子、  
 け換る子供がゆらぎ、  
 至本石イヤ、  
 婦の幸着るれば、  
 是うら儲けらるるが僕の子  
 嫁が儲さう放届けと、  
 小児を我長男のつ子  
 後りぢや、  
 功徳無事を被成て候

「四五度  
 通にお客  
 の子放ま  
 ねとて、  
 のは、  
 でお客のお用事



「是れと、  
 程、  
 甘、  
 日、  
 知、  
 育、  
 一、  
 松、

「生、  
 貴、  
 お、  
 石、  
 被、  
 て、  
 つ、  
 出、  
 う、  
 お、  
 何、  
 一、



「中、  
 買、  
 内、  
 け、  
 ま、  
 私、

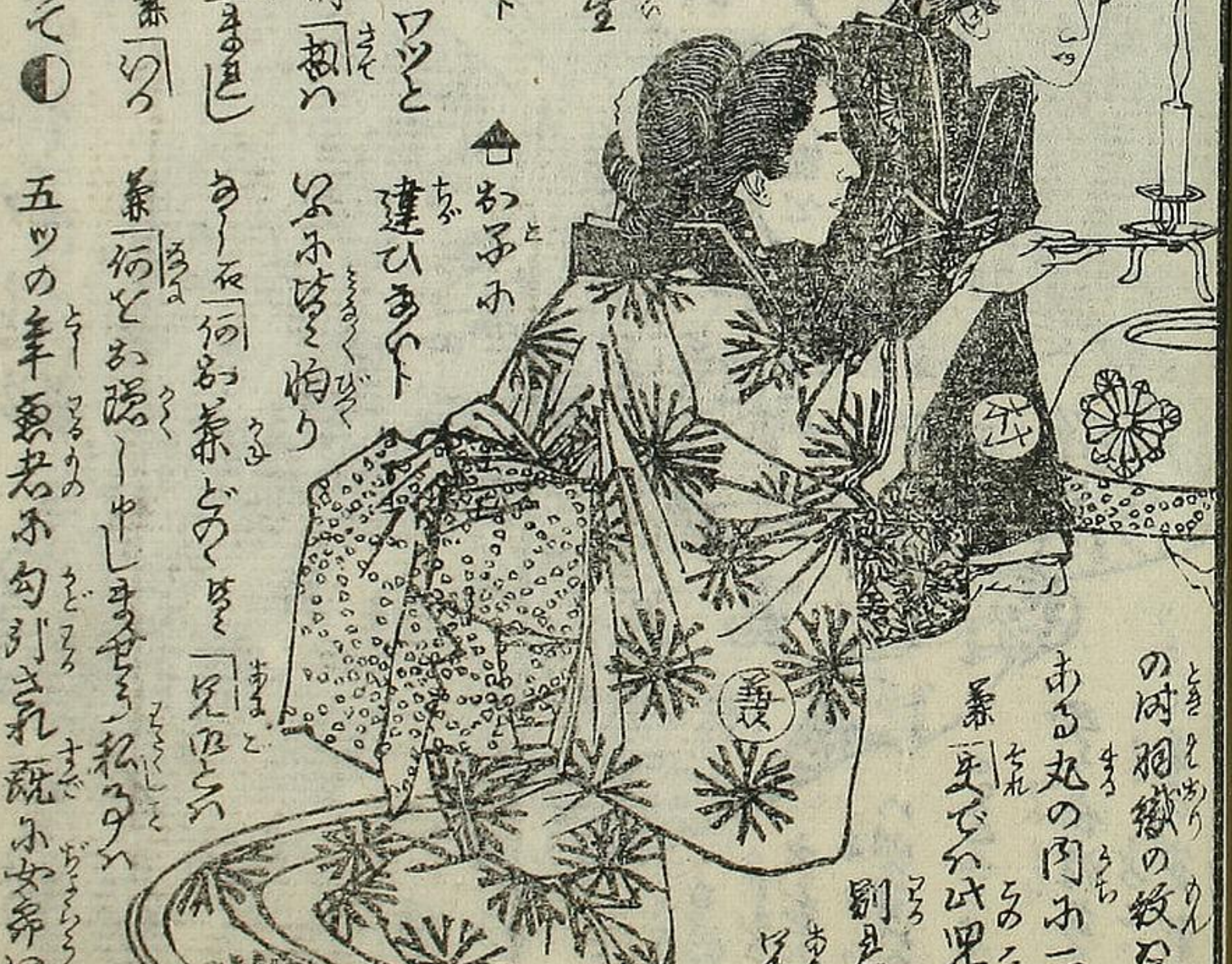


ついで美向雅儀へ一子か身の上  
 他家へ養ひに身をあづかる切實  
 彼一ゆえと養期と極むゆ昔  
 養野の雛子後の鶴子と養  
 急を難く横をくかえ掛けし  
 一子と助け下さるやう只養を頼む  
 中か定めり押付ける養子と  
 養むゆえか捨ざり恩養の  
 親子の情約分られぬ養育  
 被成下ゆつて大養至極小  
 養小結しあがら連合石高君の  
 養由計り難く養は迷惑成され  
 ゆへ何者へ成とも養をい可被下ゆ



● 養小記してさうらうと末  
 と開き楠氏の内室  
 小養との六浦  
 一三系  
 養何とお隠し申しませうと松子ゆい  
 五ツの幸養若小勾引され既小女帯に改へ

世の抱養ひと養ゆ由承知  
 養一也とも唯々一命  
 助け下子小速不脱心  
 由推家下され由計ひ  
 養入ゆ松事由志願小依て  
 養果ゆ知ぬ放棄下へ養ツて  
 養妻小由好意と申開け再生  
 の対と結て養く謝し下ゆト  
 石高君を紙と養物に依る養ハツと  
 養出ゆ何色由慈ひ小徳に村  
 けは陽養ゆて意に全子と改まる道  
 養子又小児の内実父へ兼  
 成るお方でもさう平る石



養何とお隠し申しませうと松子ゆい  
 五ツの幸養若小勾引され既小女帯に改へ







ついでに  
母と参り申す

「お下り起返  
るせえ」

「お藤  
ら殿で参り申す

「お藤  
イヤ様で行り参られ  
候心証を承取ぬ

「お同通りの様  
候へば申す候

「お成は  
し候様も申す

「お藤  
申す候様も申す



七郎次八起と云  
ハ悪ハ候ハ必ハ候様  
ハ候今更ハ悪  
ト申す候様也  
ト申す候様也  
ト申す候様也

「お藤  
申す候様も申す

「お藤  
申す候様も申す

「お藤  
申す候様も申す

「お藤  
申す候様も申す

「お藤  
申す候様も申す

「お藤  
申す候様も申す



「お藤  
申す候様も申す





戸外の音物騒しく頼後りせ

一人の男が逃て亭を丁推の

己の松波無様くト返紐

来るは後より足配入の

五帝去津と那の若者二三

人共小遊致まじりか彼曲

若か石小爪実き膝をせ丁

指が捕るあをきり小傍

能つる人しく何も己らた遣とやア

三田五子後入て居る己らの様

とま前が盗とまり多き人違へ

己ら取とるは村人五子 逆調と

あつたは助り己れが



後布を捨て居るア所ッ踏うらうら

方々をたがれ一云る

後布を捨拍戸

の内へ投ゆむ下着の袋

烟以居しが雨へ何や

政は横を物とて

何材布が内おさう

まろ〇扱己其おひ

ト中と改め成程三田五

十様送入て

コレ小傍様布

交取れ小傍

海を己



小傍

生標

五事

と云

ての

杉田

大人

大人

大人

大人

大人

大人

あり

糺

糺

糺

糺

糺

糺

糺

糺

糺

糺

糺







床の間の日の影の長さを引く  
日御媛の湯も



夕の影の長さを引く  
日御媛の湯も

一泊した  
お政の影の長さを引く  
日御媛の湯も



夕の影の長さを引く  
日御媛の湯も

お政の影の長さを引く  
日御媛の湯も





△開くまじとあひの外二三論  
冬玉梅の姿空くつば今日  
花の開きハ日頃の恨  
とどろく若兆一葉と

△開くまじとあひの外二三論  
冬玉梅の姿空くつば今日  
花の開きハ日頃の恨  
とどろく若兆一葉と

△開くまじとあひの外二三論  
冬玉梅の姿空くつば今日  
花の開きハ日頃の恨  
とどろく若兆一葉と

△開くまじとあひの外二三論  
冬玉梅の姿空くつば今日  
花の開きハ日頃の恨  
とどろく若兆一葉と

△開くまじとあひの外二三論  
冬玉梅の姿空くつば今日  
花の開きハ日頃の恨  
とどろく若兆一葉と

△開くまじとあひの外二三論  
冬玉梅の姿空くつば今日  
花の開きハ日頃の恨  
とどろく若兆一葉と



△開くまじとあひの外二三論  
冬玉梅の姿空くつば今日  
花の開きハ日頃の恨  
とどろく若兆一葉と

△開くまじとあひの外二三論  
冬玉梅の姿空くつば今日  
花の開きハ日頃の恨  
とどろく若兆一葉と

△開くまじとあひの外二三論  
冬玉梅の姿空くつば今日  
花の開きハ日頃の恨  
とどろく若兆一葉と



△開くまじとあひの外二三論  
冬玉梅の姿空くつば今日  
花の開きハ日頃の恨  
とどろく若兆一葉と

△開くまじとあひの外二三論  
冬玉梅の姿空くつば今日  
花の開きハ日頃の恨  
とどろく若兆一葉と



鐵等殿も侍もさし初めはきくと強てさへ信も煙草  
 入と二雨の落し小巻以残もねへ娘来まふ夕ア夜のしと  
 けふあついのね  
 きて今日落着て床ねく眠うてらんやうし何の  
 ぞ一卜床入く支ねの上「物乞ふが金乞ひ

か  
 店



船家の「才」を「才」  
 船のお小使の店がある宵の内まへ床て夜のお

成る羽根を渡け天狗小僧も言花お又  
 秋葉へでもお出けやう上「四切の袖ひしと

あつておけおるうもおび入るおの燭臺  
 携へてさるの葉のさるう「三浦の葉の

るもおまはるまはとおれん上「物乞ひ  
 めいりさるう「命捨るの光情整の持

物乞ひ「物乞ひ」さるの「物乞ひ」さる  
 出まあて下とさるの出まう「一夜窓のたると

途杉田氏の今の位番新番「郵便の葉が  
 福は「何れもれは「何れと結ぶる上「夜国の

福は「何れもれは「何れと結ぶる上「夜国の

まと「国免免の折折の門」  
 有と下は「国免免の折折の門」

あふり上羽織と着て身支度さる  
 西心と帯の門の「雨免やされ杉田

氏のおまの「さる」さる「さる」さる  
 さるがたさるさる「六浦の「作せの「某」の

六浦と帯でさる「先刻都までさる「六浦  
 内かさう「夜お結やて居まら「物乞ひ

さる「さる」さる「さる」さる「さる」さる  
 さる「さる」さる「さる」さる「さる」さる

さる「さる」さる「さる」さる「さる」さる  
 さる「さる」さる「さる」さる「さる」さる





つぎ

お初め

おれど和

備前

の

杉田薫

心

よして

徒堂と集わ

るものい

生極ま立ぬ

善血の企申身

の破滅と處世



回 落布被さ

に糸引被さ

家の汚れと

孝ト止と地

世が殺害

上初

石

あう

正二の多

大勢

志

可て

親

子へ現在の故

るがの由河

草六机上

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

放再三再四

お殊ゆせど

まおまよお初

るく

にその

覚悟せよと

るく

大数ある

乃お勢

九州へ

そお

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

お殊ゆせど

まおまよお初

るく

にその

覚悟せよと

るく

大数ある

乃お勢

九州へ

そお

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

お殊ゆせど

まおまよお初

るく

にその

覚悟せよと

るく

大数ある

乃お勢

九州へ

そお

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

味殺と

香月夜鐘五下







